



忘れられない「馳走」

沖繩県立首里高校6年 金城 幸

畑の後で知り合いの家に飲みに行った父親が、とんでもないものを連れて帰ってきた。白い子ヤギである。安くで譲ると言われたのでもらってきたのだという。

「何言ってるの、うちにこんなの持ってきてきてどうするのよ。」

驚いて思わず大声を出してしまったが、台所から出てきた母は、私の肩越しに子ヤギを見て嬉しそうな顔で言った。

「あい、上等なヤギだね。これだったら来る正月にはつぶせるさあ」

「た、食べるの?」

私がどもると、父親は大声でからからと笑った。

「まーさんどうまいぞ。だあ、これの世話は幸がやりなさいね。」

首にひもをかけられたヤギが青い目でじっとこちらを見ている。その目を見ながら、私はぺたんと座り込んでしまった…。

私の家は農家だ。主に菊と野菜を作っている。今、ちょうど、出荷の時期で忙しいらしいが、それは私の知ったことではない。

高校生は遊びと勉強で手一杯なのだ。しかしそこまで家業に無関心だった私たちが、ヤギの世話を押しつけられるままに始めてしまった。別に朝から晩まで働かざるを得ないのだ。この子ヤギ、白い毛と青い目のジョセフィーヌが。

ジョセフィーヌの世話は早朝と夕方にする。朝は五時には起きて彼女のいる小屋の掃除をし、乾草を敷き、水と買ってきた飼料をやる。ヤギのなど見たことないので世話の仕方など全くわからなかったのだが、母もヤギは料理の仕方しか知らず、父の指導も極めてあっさりしたものだった。

「えさは?」

「草と水」

「どうやって飼えばいいの?」

「雨に濡らしたらだめだ」

この程度の知識で、それでもちゃんと育てているのだから、生き物というのは不思議なものである。聞いた話ではヤギの世話は他の家畜よりも難しいらしいから、ジョセフィーヌが特別に丈夫ということかもしれない。

夕方、えさと水を替えていると、母が様子を見にやってくる。

「だあ、ヤギは元気ねえ？えーヒージャーグワー（ヤギ）、もっと食べて太りなさいよ」

「ジョセフィー又って呼んでよ」

「なんね、その変な名前は。ヤギはヤギさあ」

悠然と台所にひっこむ。嫌な母である。

休みの日は青い草をたべさせるため、ジョセフィー又を外に

連れ出す。遊ばせている畑が多くて、柔らかい草には困らない。春も、夏も、秋も、冬も、草は絶えない。思えば沖縄はいい所だ。夏は腰までくる草の中でジョセフィー又と遊んだ。走ると細い足でどこまでもついてくる。ピンクの長い耳がぱたぱたと草いきれをはらった。九月も十月も十一月ものどかに過ぎていく。いつしか私は、このヤギが食べるために飼われていることを忘れていた。

両親の言ったことも私たちの悪い冗談と片付けていた。しかし、私の考えは甘過ぎた。年の暮れも迫った十二月の二十九日、私が熟睡している夜中に、ヤギはあっさりと殺されてしまったのだ。

朝起きてその事を知った私がどんな行動をとったかは憶えていない。だがそれから二日間、私は部屋にこもって何も食べなかった。階下の客の声に顔をしかめながら、時折思い出したように泣いた。父も母も、謝りには来なかった。

大晦日になって、遊びに来た叔父が話を聞いて二階に上ってきた。

「済んだことで意地をはるな。体壊したら大変だろう。皆心配してるぞ」

私もいいかげん疲れていたのだろう。渡されたヤギ汁を、勧められるままに一口飲んで、また泣いた。おいしかったのだ。叔父が涙と鼻水を流しながら汁を飲む私を見て、

「お前今まで何も考えないで生き物食べてたのか？」
と言った。

「だっつてずっと売っているのを食べていたのに。ジョセフィー又は自分で飼っているヤギだったのに」

「食べるってのは結局じつじつことよ」

私の感情は納得しなかったが、ずっと養豚をしてきた叔父の言葉には、妙に説得力があった。私はヤギ汁を全部平らげた。

それ以来、私の中にはずっと、食べられたヤギが住みついている。正直いつて、生き物を食べるとはどんな事なのか、まだ自分の答えは見つからない。しかし、私は今まで食べた生き物の命で生きている。その実感は、大晦日のヤギ汁の味と同じくらい確かに、私を満ち足りた気分にするのだ。

